博士後期課程を終えて

２０１５年博士後期課程修了　澤村　文香

公立中学校の養護教諭として生徒たちと関わる中で「身体を診る」ことに関しての学びが足りず、生徒にどのように接するべきか悩むことが多くありました。在職１５年目に一念発起し、女子栄養大学大学院修士課程に入学し「養護教諭が行うタッチング」についての研究に取り組みはじめました。修士論文を書き上げたとき「児童生徒が捉えているタッチングについて検討しなければ、この研究は中途半端なままで終わってしまう。」という思いが湧き上がり、博士後期課程への進学を決意いたしました。

博士後期課程では、橋本紀子教授の下、教育学研究室で研究を進めさせていただくこととなりました。温かく迎え入れてくださった橋本先生に感謝申しあげます。最初の春ゼミで、研究室の先輩であり、これまで参考文献として活用させていただいていた「看護とタッチに関する実践的研究（風間書房）」の著者　藤野彰子先生にお会いした時は、夢のような気持ちになったのを今でも鮮明に覚えています。

博士後期課程での１年目は、修士論文を学会誌に投稿することに精一杯の日々でした。２回の査読を経て学会誌に掲載された時には、「研究が一般化され、世に広く公表される」ことの重みと、日々何気なく行っている養護教諭が行うタッチングの科学的根拠を示すことができた喜びを感じました。２年目からは、修士課程での研究を深めるため１０名の養護教諭にご協力をいただいた半構造化面接と、小学校・高等学校各１校にご協力をいただいた保健室のフィールドワークを実施しました。特にフィールドワークは、研究者としてはもとより、養護教諭として他者の実践をじっくりと学ぶ貴重な機会となりました。養護教諭は児童生徒に関わる際、保健室に入ってきた瞬間から観察を行い、訴えを丸ごと受け止めると共に、家庭環境や学級で置かれている状況を瞬時に思い浮かべ、判断し、対応へと繋げております。養護教諭と児童生徒とのやりとりを一つ一つ詳細に記録し、文章に起こし、まとめるという作業を積み重ねる中で、養護教諭が行っている教育職員としての営みが明らかになっていきました。今後の私の課題は、博士論文としてまとめたものを学会誌へと投稿し、この貴重な調査で得られた知見を一般化することであります。

現職養護教諭として働きながら博士後期課程に在籍し、調査研究を進めることに関しましては、橋本先生をはじめ、研究室の先輩である茂木輝順さん、森岡真梨さん、丸井淑美さん、共に大学院で学びを深めた田中和江さん、助手の佐久間慶子さんのご指導とご支援があったからです。この場をお借りして心より御礼申しあげます。月に一度のゼミは、いつも私の勤務終了後に設定していただき、夜遅くまで議論を重ねてくださいました。教育学の視点から、広く、深く、様々な角度からのご助言、ご指導をいただきましたおかげで、研究に厚みが出たと実感しております。本当にありがとうございました。

２０１５年４月よりしばらく学校現場を離れることになりましたが、今後も仕事と研究の両立を図り、児童生徒のため、養護教諭資質向上のため、学校教育の発展のため、教育学研究室の一員として研究をさせていただきましたことに誇りを持ち日々精進していく所存です。引き続き、ご指導ご鞭撻のほどどうぞよろしくお願い申しあげます。